演題番号 : 20

演題名 : 猫伝染性腹膜炎に対するモルヌピラビルの
治療効果についての考察

発表者氏名 : ○松井琢真、小松 亮、小松奈津貴、佐藤泰紀、坂 由希、
陶器有里花、白石 圭、矢谷仁人

発表者所属 : あきたこまつ動物病院・秋田県

1. はじめに：猫伝染性腹膜炎（FIP）は強毒性の猫伝染性腹膜炎ウイルス（FIPV）感染によって引き起こされる疾患である。FIPV は非病原性の腸コロナウイルス（FECV）の突然変異により発生するとされている。FIP は腹水や胸水の貯留を特徴とするウェットタイプ、臓器に肉芽腫を形成するドライタイプ、それらの特徴を併せ持つ混合タイプの 3 つに分類されている。以前は致死的な病気であった FIP だが、近年 GS-441524 やモルヌピラビルといった薬剤を使用することで寛解を目指せる病気となった。モルヌピラビルは RNA ポリメラーゼを阻害することによりウイルスの増殖を抑制する抗ウイルス薬の一種である。今回は FIP のウェットタイプと診断され、治療としてモルヌピラビルを使用した 3 例を報告する。

2. 材料および方法：FIP（ウェットタイプ）診断時の年齢が約 1 歳の猫 3 頭を対象とした。診断には血液検査、超音波検査、RealPCR 検査、FCoV 抗体価検査、血清蛋白電気泳動検査などを用いた。治療としてモルヌピラビル（10mg/kg BID）、プレドニゾン（初期用量 1mg/kg 漸減）を使用し、定期検査として血液検査・超音波検査などを実施しながら 12 週間治療を継続した。

3. 経過：診断時、全ての症例において元気・食欲の低下、腹水の貯留、グロブリン濃度の上昇が認められた。モルヌピラビル投与開始後、3 症例全てにおいて臨床症状の改善が見られ、1～2 週間後には腹水が消失した。血液検査においてはグロブリン濃度の低下が認められ、その他の血液検査項目に有意な変化は認められなかった。また、この内の 1 症例においては 12 週間の治療を終了した 6 週間後に食欲廃絶を主訴として来院し、検査の結果 FIP 再発の可能性が示唆された為、モルヌピラビル投与を再開した。投与期間は 16 週間に延長し、再度寛解が得られた為経過観察中である。

4. 考察：以上の結果より、モルヌピラビルは FIP に対して有効な治療薬であることが示唆された。今回の症例においては現段階では明らかな副作用は認められていないものの、モルヌピラビルは腎毒性、肝毒性、催奇形性や発がん性を有するとされている。また、今回は GS-441524 の治療推奨期間に倣い 12 週間の投与を行ったが、1 症例においては再発の可能性が示唆された。よって、今後はモルヌピラビルの安全性、使用用量・治療期間についての実験的なデータの蓄積が必要だと考えられる